

鹿児島の昆虫 63

が おもして蛾 その1

昆虫担当 中峯 敦子

県内の蛾類は名前が分かっているものだけでも2,000種余りに及びます。また種子島、屋久島、三島村、十島村、奄美群島など南西諸島の調査が進むと3,000種はいるのではないかとされています。今回は、企画展「チョウに負けん『蛾』」で紹介している蛾のエピソードを紹介いたします。(タイトルの「おもしてが」は鹿児島方言で「面白いね。」という意味です。)

「サツマ」の蛾?…サツマニシキ

企画展の冒頭でお出迎えしている蛾が「サツマニシキ」(マダラガ科)です。名前に「サツマ」のつく蛾がいるなんて初めて知ったという方や、焼酎の銘柄かお相撲さんのしこ名みたいと思う方もいるようです。残念ながらなぜ「サツマ」がつくのかその由来を調べましたが分かりませんでした。

輝く青色に朱色、白色、緑色のまだら模様の翅(はね)を見ると、日本産蛾類の中で最美麗種とも称えられるのがうなずけます。蛾の多くは夜行性ですが、この蛾は昼行性で、鹿児島では初夏と秋、年に2回成虫が現れます。今の季節ならフジバカマやセイタカアワダチソウなどの花に飛来する姿を見ることができるかもしれません。



フジバカマに飛来したサツマニシキ

食草(幼虫が食べる植物)はヤマモガシの葉です。この木が自生する本州(紀伊半島以西)、四国、九州、沖縄がサツマニシキの分布する地域です。南に行くほど後翅の白化が進み、翅の青い輝きが増す傾向があります。企画展では、その変異もご覧いただけると幸いです。

さて、サツマニシキはその美しさとは裏腹に、驚きの行動をすることも知られています。危険を感じると、胸部の両側から悪臭のする、泡状の黄色い液をブクブクと出すのです。この泡は人の皮膚についても問題はありません

が、天敵の鳥に対しては有毒なのだそうです。青くきらめく美しい翅の色。しかし自ら有毒であることを捕食者に知らせる警告色でもあるのです。

イモムシ・ケムシ・シャクトリムシ

蛾やチョウの幼虫は、その姿や生態の違いで様々な呼ばれ方をします。

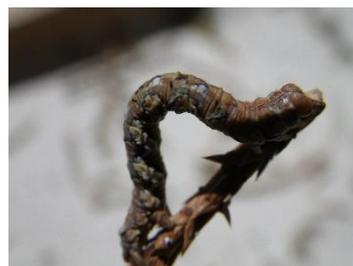


イモムシ・アオムシ(オオスカシバ)

上の幼虫は、オオスカシバ(スズメガ科)。柔らかい円筒形の体の最後尾にぴんと立つアンテナがチャームポイントです。この幼虫のように体に毛がないものをイモムシ(芋虫)、さらに緑色だとアオムシ(青虫)といいます。また、長い毛のあるものはケムシ(毛虫)、指で長さを測っているように移動するシャクトリムシ(尺取虫)、小枝や葉を糸でつづった「みの」の中で過ごすミノムシ(蓑虫)など呼び名は様々です。



ケムシ(リンゴドクガ)

シャクトリムシ
(シャクガ科の1種)

いにしえの人々が農作業などの傍らで目にした面白い形態の幼虫たちに、愛らしいニックネームをつけてくれたのだと嬉しくなります。